

四旬節第一主日

2011.3.13

創世記 2・7-9, 3・1-7

ロマ 5・12-19

マタイ 4・1-11

先週の灰の水曜日をもって、今年も四旬節を迎えました。今日は四旬節第一主日です。回心の恵みを願ってこのミサを共にささげ、四旬節の典礼を通して呼びかけておられる主のみ声に従って行く決意を新たにしたいと思います。

四旬節の精神、四旬節のキーワードは回心ということです。教会において回心という言葉を使う時には、何よりそれは、神のもとに立ち戻ることを意味しています。神のもとに立ち戻るという表現は、抽象的で、漠然としたものに聞こえるかもしれません。けれども、神を信じる者たちにとって、それは決して抽象的でも、漠然とした表現でもないはずです。神に立ち戻るということは、自分たちが信じている神に立ち戻ることだからです。神を信じる信仰のあり方は、人によってそれぞれかもしれません。けれども、カトリック信者である私たちにとっては、洗礼が全ての出発点です。洗礼を受けることによって、私たちは自分が信じる神への信仰の道に入ったのです。神のもとに立ち戻るようにとの回心の呼びかけは、それゆえに、私たちにとって自分の信仰の原点である洗礼の恵みに立ち戻るようにとの呼びかけです。

洗礼を受けることによって、私たちはどのような神と出会い、神への信仰の道に入ったのでしょうか。四旬節第一主日の今日の聖書朗読は、私たちが信じた神はどのような神であるかを、今日洗礼志願式をお受けになる方々と共に、最も根本的なところに戻って、あらためて見つめ直すように招いています。この招きに新たな心で応えることが、私たち皆にとっての回心、すなわち、神のもとに立ち戻る要点だからです。

第一朗読の創世記の物語は、私たちが信じる神がどのような神であり、私たちはその神の御前でどのようなものであるか、キリスト教の信仰が拠って立つ、神と人間である私たちの関係を明らかにしています。私たちはこの物質世界の他の生き物と同じように、地の塵から造られています。けれども、人間である私たちは、神のいのちの息吹を吹き込まれた者として、私たちがそれによって生きる者となったいのちの中枢において、神のいのちと繋がった者たちです。単に生物的に生きるというだけではなく、私たちのうちには、自分のいのちの源である、

神のいのちへの憧れが息づいている。これが、創世記に基づくキリスト教の信仰における最も基本的な人間理解です。私たちは自分のうちに息づいている本来のいのちへの憧れに促されて、いのちの与え主である神への信仰を受け入れたのです。

いのちの与え主である神の願いは、私たちの中に吹き込まれたいのちの息吹が消えてしまうことがないようにということです。それが、私たちへの神の愛の思いです。それゆえに、神は私たちに禁令としての掟を与えてくださったと創世記の物語は語っています。「園の中央に生えている木の実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない。死んではいけないから。」という物語の中のことばは、そのことを語っています。

創世記の物語の中の蛇も、福音書の中に登場する悪魔も、私たちのいのちの源である神と、神の掟のもとにある私たちの間に忍び寄り、私たちに絡み付いて私たちを死に至らしめる「罪」の象徴です。キリスト教の信仰理解において、罪とは神から与えられた、人間としての分限を超えて、自らが神のごとくに、全てを自分の意のままにしようとすることです。蛇に絡みつかれ、身の自由だけでなく、心の自由までも奪われるとき、私たちは感謝ということを忘れます。与えられている豊かないのちを、与えられたままに感謝することが出来なくなります。与えられたいのちの豊かさに対する感受性を失って、心の目が曇らされてしまいます。もはや、神を神として認めることができなくなり、自分のいのちの源から断ち切られてしまいます。この全ては、私たちが、私たちの心の中にごめき、私たちに執拗に絡みつく「罪」に負けて、自ら選び取ってしまったことだと、創世記の物語は私たちを糾弾しているのです。どうしてそうなったかと言えば、私たちは、神に与えられた人間としての分限を守って、神の禁令に従うことも出来たのに、それに従おうとしなかったからです。つまり、人間としての私たちに与えられている選択の自由を、自分のために、自分のうちなる欲望のために使ったからです。神の呼びかけを受けて、自ら進んで、自由にそれに応えることが出来る、人間だけに与えられた、神との愛の交わりの可能性を拒否したのです。それゆえに、「罪」とは、私たちに選択の自由を与え、私たちが自らの意志で、御自分との愛の交わりに応えることを待っておられる神の愛に対する「侮辱」であり、私たちへの神の愛の御計画に対する「反抗」なのです。神への反抗として「罪」によって、私たちはいのちの源である神との交わりを失って、自分が何故生きているのか、このいのちが何のためのいのちであるかということも見失ってしまっているのです。教会において「罪」ということばを聴く時、それは今述べたようなことを意味しています。

新約聖書は、キリスト教の信仰の中心に立っておられるイエス・キリストを指し示します。私たちのキリスト教の信者としての信仰はイエス・キリストによってもたらされる救いを信じる信仰です。教会において、イエス・キリストによる救いということが言われる時、それは何よりも、「罪」からの救いを意味しています。そして、その「罪」とはこれまで述べたような意味での「罪」のことです。

キリスト教の信仰におけるイエス・キリストは、私たち全ての人間と同じ一人の人間となって、神のもとからこの世に来てくださった神の子です。イエス・キリストは、私たちが自分の選択によって、自ら閉ざしてしまった、神とのいのちの交わりへの道を開いて、私たちが「罪」から救うために人となってくださった神です。神はそれほどまでに、私たちがいのちの交わりに呼び戻そうと望んでおられるのです。イエス・キリストにおいて示された、このような私たちへの神の思いが、神のゆるしであり、神の愛です。

私たちは洗礼の恵みによって、この神の愛に包まれ、神のゆるしをこの身に受けて、神とのいのちの交わりの中で神の子らとされたのです。

四旬節に求められている回心は、その神の愛の恵みに私たちが信仰を新たに立ち戻ることです。

福音書のイエスの荒れ野の四十日間に姿を現す悪魔の誘惑は、創世記の物語よりもずっとリアルに「罪」とは何かを示しています。イエスは、今日の第二朗読のローマの教会への手紙が教えるように、徹底的に神に従うことによって、悪魔の誘惑に打ち勝たれたのです。それが、イエスが私たちに救いをもたらすために、一人と人間となって示してくださった救いへの道です。

この四旬節の始めに、イエスは荒れ野でのご自分の体験を私たちに示して、私たちがイエスと共に歩む、神に従う者の道に招こうとされています。その道はたとえ十字架への道であろうとも、全てを神から与えられたものとして受け止めることによって、ついには神から与えられた大いなるいのちへの感謝に至る道です。イエスとともにこの道を歩み通すことによって、私たちはイエスによってもたらされた救いにあずかる者となるのです。

この四旬節、新たに洗礼の恵みに与る方々とともに、神のみ前で、感謝のうちに永遠に絶えることのないいのちの讃歌を歌うことが出来るよう、回心の呼びかけに応えて行きたいと思えます。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高